

# 高校生の仲間関係の排他性に対人関係における受容性 性と仲間集団の閉鎖性を与える影響について 性 差に着目して

著者	松本 恵美
雑誌名	東北教育心理学研究
巻	15
ページ	29-37
発行年	2022-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00134711">http://hdl.handle.net/10097/00134711</a>

# 高校生の仲間関係の排他性に対人関係における受容性と 仲間集団の閉鎖性が与える影響について

—性差に着目して—

松本 恵美

(弘前大学教育学部)

## 問題と目的

青年期は、子どもから大人への移行期であり、それまで精神的に依存してきた親から心理的に独立しようとする心理的離乳の時期である。青年は、親から心理的に独立するとともに、依存対象を家族集団から仲間集団へと移行していく時期であるともいえる(和田ほか, 2016)。そのため、青年期における仲間関係は、社会性の発達の基礎となるとともに、自己の確立にとっても大きな影響力を持ち、心理的充足を得る上でも重要な役割を果たしている(國枝・古橋, 2006; 松永, 2011)。和田(1998)においても、友人が青年期のストレスを低減させる重要なサポート源であることが示唆されており、友人との良好な関係性が情緒的満足へつながり、学校生活への適応を高めると考えられる。

仲間関係は青年期の初めに質的に変化し、生徒はメンバーが固定化された親密性の高い仲間集団を形成する(和田ほか, 2016)。仲間集団とは、親や他の大人に対して持つような従順的な地位にない、他の子どもと形成する対等な集団である(Bossard&Boll, 1971)。青年期の仲間集団について、保坂・岡村(1986)は、思春期前半の中学生の時期にチャム・グループ、思春期後半の高校生の時期にピア・グループと言う仲間集団が出現すると指摘している。チャム・グループとは、互いの共通点や類似点を言葉で確認し合い、自分たちが同質であることを重視する同年齢の同性集団である。一体感や同調性を強く求める集団であるため、同調圧力が最も生じやすく、仲間集団に所属していない他者に対して閉鎖的であるとしている。一方で、ピア・グループは、互いの違いを認め合い、互いの価値観や理想などを語り合う関係であり、共通性や類似性のみでなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって、他者との違いを明らかにし、自立した個人として互いを尊重し合うことができる集団であるとしている。落合・佐藤(1996)による研究においても、中学生の同調性が最も高く、高校生、大学生と年齢が上がるにつれて同調性は低下し、相互に積極的に理解しよう

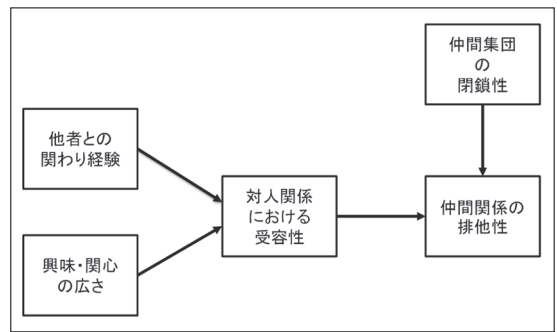
とする付き合い方が増えることが示されており、高校生を境に、同質性を重視した関係から、閉鎖性の低い、自分と異なる特徴を持つ他者であっても受け入れる異質性を重視した関係へと移行すると考えられてきた。しかしながら、現代の高校生はピア・グループを形成していないという指摘もある。榎本(1999)の研究では、高校生も中学生と同じように親密確認や共有活動、閉鎖活動といった友人との類似性を重視しており、仲間以外の他者を入れられないという特徴を持つ集団を形成していたという結果が示されている。高坂(2010)の研究でも、自分と異なる特徴を持つ他者を拒否し排除したいという気持ちの強さである「異質拒否傾向」が高校生になっても低下しておらず、中学・高校を通じて持ち続けていたことが示されていた。これらのことから、現代の高校生は、同調性を重視した閉鎖性の高い仲間集団を形成していることが予想される。

仲間集団を形成することは、特定の相手との親密性を高め心理的充足や情緒的満足を得られるというポジティブな側面がある一方で、仲間以外の他者を寄せ付けず、排除しようとする排他性を高めてしまうというネガティブな側面があると考えられる。仲間関係の排他性とは、集団や関係において、「自分の仲間であるかどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動することに比べ、仲間以外の生徒と活動することを楽しくないと感じたりする程度の強さ」のことである(三島, 2004)。仲間関係の排他性が高まると、仲間集団の基準に合わない他者や自分と異なる特徴を持つ他者に対してネガティブな態度を持つようになり、仲間から外そうとするようになることが指摘されている(石田・小島, 2009; 黒沢, 2011)。この、仲間から外そうとする行為は、仲間外れやいじめといった問題につながる可能性が高い。そのため、仲間集団の閉鎖性や同調性が高いと考えられる高校生の時期の仲間関係の排他性に、影響を及ぼす要因について検討することは重要であると考えられる。

松本(2018a)では、小学生・中学生を対象に、仲間関係の排他性に関連する要因の関係性について検討した。

仲間関係の排他性に影響を与える要因として環境要因である仲間集団の閉鎖性と個人要因である対人関係における受容性の2つを取り上げた。仲間集団の閉鎖性とは、自分が所属している仲間集団が閉鎖的であると認知する強さの程度のことであり、自集団が自集団以外の他者に対してどのような態度や行動をとっていると感じているかを測定したものである(松本, 2018a)。また、対人関係における受容性とは、ありのままの特徴を受け入れる態度のことである(川岸, 1972)。その結果、小学生と中学生いずれの発達段階においても、仲間関係の排他性に、仲間集団の閉鎖性が正の影響を与え、対人関係における受容性が負の影響を与えていることが明らかとなった。また、松本(2018a)では、対人関係における受容性に影響を与える要因についても検討がなされており、要因として他者との関わり経験及び興味・関心の広さを取り上げ、どちらの要因も対人関係における受容性に正の影響を与えていることが示されている。この結果から、仲間関係の排他性に影響を与える諸要因の関係性モデルとしてFigure1が成り立つことが明らかとなっている。

仲間集団の排他性に関する先行研究では、仲間関係の排他性が最も高まる時期である初期青年期の中学生を対象に検討しているものが多い。しかし、現代では高校生であっても中学生と同じように仲間関係の排他性が高いことが予想されるため、高校生の仲間関係の排他性に影響を与える要因についての検討も必要であると言える。そこで本研究では、高校生の仲間関係の排他性に個人要因である仲間集団の閉鎖性と、個人内要因である対人関係における受容性がどのような影響を及ぼすのかについて明らかにすることを目的とした。また、高校生の対人関係における受容性に、他者との関わり経験および興味・関心の広さがどのような影響を及ぼすのかについて検討することを第2の目的とした。加えて、仲間関係の排他性が仲間集団の閉鎖性から受ける影響に、性別による違いがみられるかについて明らかにしたいと考える。小学生と中学生を対象としていた松本(2018a)の結果は、男女込みで検討した結果であり、性別によって要因間の関係性に違いが見られるかについては検討がなされていなかった。しかし、男子生徒よりも女子生徒において他者を受け入れない閉鎖的な活動が多く見られることが示されていることや(榎本, 1999)、女子は自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしているという指摘があることから(保坂, 1993)、性別によって仲間集団から受ける影響に違いが見られることが考えられる。特に青年期女子においては、仲間集団との同調性が高く、仲間から拒否されたりクラスで孤立し



注)「仲間集団の閉鎖性」から「仲間関係の排他性」へのパスは女子のみに見られると想定した。

Figure1 要因間の関係性モデル

たりしないために必要以上に仲間集団に合わせているという結果(佐藤, 1995; 須藤, 2012)や、仲間を独占し、一緒に行動したいという欲求を強くもつ仲間集団を形成しているという結果(有倉, 2011)が示されている。これらの結果から、青年期の女子は、クラスや仲間集団から浮いた存在になることに対して過敏になっており、仲間集団から浮いた存在にならないために必要以上に仲間集団に合わせていることが推測される。それにより、青年期の女子は、個人としては相手を排除する気持ちが少ない場合であっても、所属する仲間集団からの影響を強く受けてしまい、個人の仲間関係の排他性が高くなってしまふことが考えられた。

そこで本研究では、男子と女子で異なる要因間の関係性を想定し検討することとした。仲間集団の閉鎖性から仲間関係の排他性への影響は、青年期の女子に特徴的に見られるものであると考えられたため、女子生徒には、対人関係における受容性と仲間集団の閉鎖性が仲間関係の排他性に影響を与え、他者との関わり経験と興味・関心の幅が対人関係における受容性に影響を与えるという松本(2018a)が作成したモデル(Figure1)を想定し検討を行った。一方で男子生徒は、仲間集団からの圧力や仲間からの拒否不安が女子に比べて低いことが考えられたため、仲間集団の閉鎖性からの影響は想定せず、仲間関係の排他性には対人関係における受容性のみが影響を与え、他者との関わり経験と興味・関心の幅が対人関係における受容性に影響を与えるというモデル(Figure1)を想定し検討を行った。

以上から、本研究では以下の仮説について検証する。

1. 高校生の「対人関係における受容性」には、「他者との関わり経験」と「興味・関心の広さ」が影響を与える。
2. 女子高校生の「仲間関係の排他性」には、「仲間集団の閉鎖性」と「対人関係における受容性」が影響を与える。

3. 男子高校生の「仲間関係の排他性」には、「対人関係における受容性」が影響を与える。

## 方 法

### 1. 調査対象者

高校生活に慣れ、仲の良いメンバーと固定化した仲間集団を形成していると考えられる高校2年生を対象とした。公立高校に通う高校2年生を対象に調査を実施し、計160名のデータを得た。そのうち欠損値を含む生徒を除いた人数は133名(男子50名, 女子83名)であった(有効回答率は, 83.1%)。本研究では, 学校で一緒に教室を移動したり, 休み時間に一緒に過ごしたりする「仲間集団」に所属していると回答した111名を分析対象とした。仲間集団に所属していると回答した生徒は, 全体の83.46%であった。

### 2. 調査時期

調査は, 2018年12月に実施した。

### 3. 調査手続き

学校長に調査内容を説明し, 調査協力を依頼した。その際, 本調査の目的および方法, 質問紙の項目の説明を行い, 倫理的観点から個人が特定されないこと, データは統計的に処理し本研究の目的以外に使用しないことを説明した。アンケート実施時は, 各クラスにおいて担任教諭によって集団で一斉に実施してもらった。対象者には, 文書にて研究の目的, 匿名性の保証, 学校の教師や他生徒に見られる心配はないこと, 参加および中止は自由であることを説明した。

### 4. 調査内容

#### (1) フェイスシート

基本属性として, 性別について回答を求めた。

#### (2) 他者との関わり経験

松本(2018b)で使用されていた他者との関わり経験尺度を使用した。「外国の人と, 関わったことがある」「障害のある人と, 関わったことがある」など, 個人が過去に, 自分とは異なる特徴をもつ他者とのくくらい関わったことがあるかについて測定した。項目は, 「たくさんある(1)」から「全然ない(5)」の5件法で回答を求めた。

#### (3) 興味・関心の広さに関する尺度

松本(2018b)で使用されていた興味・関心の広さに関する尺度を使用した。「世界に関するニュースや話題に関心がある」「違う国の文化や生活に関するニュース

や話題に関心がある」など, 他文化, 障害, 高齢者, 国際関係, 災害, 芸術, 政治の7領域についてそれぞれのくくらい関心があるか回答を求めた。項目は, 「関心がない(1)」から「とても関心がある(5)」の5件法で回答を求めた。

#### (4) 対人関係における受容性尺度

松本(2018b)で使用されていた対人関係における受容性尺度6項目を使用した。「初めて会う人のことも受け入れられると思う」「文化や習慣が異なる外国人を受け入れられると思う」など, 他者との関わりにおいて, 自分と異なる特徴をもつ相手であっても受け入れようとする気持ちの強さを測定した。項目は, 「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

#### (5) 仲間関係の排他性

松本(2018b)で使用されていた仲間関係の排他性尺度を使用した。「授業中グループを作る時, 仲良しの友達だけで一つのグループを作りたいと思う」「趣味や話題が合わないクラスメイトとは, あまり関わりたくないと思う」など, 仲間関係において自分の所属している仲間集団以外の他者や自分と異なる特徴をもつ他者を排斥しようとする気持ちの強さを測定した。項目は, 「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

#### (6) 仲間集団への所属の有無について

学校で一緒に教室を移動したり, 休み時間に一緒に過ごしたりする特定の「仲間集団」に所属しているかどうかについて回答を求めた。

#### (7) 所属する仲間集団に関する項目

(5)において, 仲間集団に所属していると回答した学生のみに対して回答を求めた。所属している仲間集団の仲間の人数, 仲間の性別について回答を求めた。

#### (8) 仲間集団の閉鎖性に関する尺度

松本(2018b)で使用した, 仲間集団の閉鎖性に関する尺度を使用した。「グループの人達はいつもグループ内の人とだけ遊んでいる」「グループには, グループ以外の人と別行動をしにくい雰囲気(ふんいき)がある」など所属している仲間集団の閉鎖性の強さを測定した。項目は, 「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

## 結 果

### 1. 各尺度の内的整合性の検討

本研究で使用した尺度について内的整合性の検討を行ったところ, 結果は以下の通りであった。他者との関

Table1 仲間集団の人数と性別による各尺度得点と標準偏差

性別	仲間集団の特性	男子					計	女子					全体	
		2名のみ		3~5名		6人以上		2名のみ		3~5名		6人以上		
		同性のみ	同性のみ	混合	同性のみ	混合		同性のみ	同性のみ	混合	同性のみ	混合		
	<i>n</i>	5	20	1	5	2	33	18	48	3	8	1	78	111
	他者との 関わり経験	平均 3.89 SD 0.57	3.06 0.69	3.29 -	3.51 1.02	3.79 0.10	3.31 0.75	3.36 0.95	3.33 0.73	3.24 0.36	3.45 0.87	3.43 -	3.35 0.77	3.32 0.84
	興味・関心の 広さ	平均 3.31 SD 0.57	3.21 0.83	3.86 -	3.37 0.55	3.93 0.91	3.32 0.74	3.10 0.55	3.20 0.72	2.86 0.25	3.11 1.04	3.57 -	3.17 0.70	3.18 0.72
	対人関係に おける受容性	平均 3.67 SD 0.62	3.51 0.63	3.83 -	3.63 0.52	3.75 0.59	3.58 0.58	3.88 0.53	3.86 0.59	3.44 0.42	3.85 0.57	3.17 -	3.84 0.56	3.72 0.6
	仲間関係の 排他性	平均 2.74 SD 0.95	2.62 0.65	2.86 -	2.77 0.19	2.14 0.00	2.64 0.62	2.54 0.67	2.61 0.54	3.62 0.70	2.70 0.82	2.43 -	2.64 0.62	2.63 0.87
	仲間集団の 閉鎖性	平均 1.58 SD 0.53	1.65 0.50	2.25 -	1.63 0.73	1.50 0.18	1.64 0.51	1.69 0.92	1.75 0.62	2.83 0.40	1.83 0.59	1.13 -	1.81 0.82	1.76 0.74

注)男女ともに、「仲間集団の人数が2名のみ」「異性が含まれた性別混合の仲間集団」に所属していると回答した者はいなかった。

わり経験尺度で  $\alpha = .82$ 、興味・関心の広さに関する尺度で  $\alpha = .85$ 、対人関係における受容性尺度で  $\alpha = .77$ 、仲間関係の排他性尺度で  $\alpha = .75$ 、仲間集団の閉鎖性に関する尺度で  $\alpha = .86$ であった。いずれも、十分な信頼性が得られたと判断し、すべての項目を採用し分析を進めた。

## 2. 各尺度の基本統計量と性差

仲間集団に所属していると回答した人数は男子33名、女子78名の計111名であった。各尺度の尺度得点および標準偏差は Table1に示した通りである。111名の内、同性のみの仲間集団に所属していると回答した学生は男子30名、女子74名の計104名であり、異性も含めた仲間集団に所属していると回答した学生は男子3名、女子4名の計7名のみであった。また、仲間集団に所属しているメンバー人数について聞いたところ、自分も入れて2名のみと回答した学生は23名、3~5人と回答した学生は

72名、6人以上と回答した学生は16名であった (Table 1)。

次に、各尺度について性別を要因とする  $t$  検定を行った。他者との関わり経験尺度においては、性別による有意な差は認められなかった。興味・関心の広さ尺度においても、性別による有意な差は認められなかった。対人関係における受容性尺度においては、性別による有意な差が示された ( $t(109) = 2.23, p < .05$ )。女子の方が男子よりも有意に得点が高いことが示され、女子の方が男子よりも、自分と異なる特徴をもつ他者であっても受け入れようとする気持ちが高いことが明らかとなった。仲間関係の排他性尺度においては、性別による有意な差は認められなかった。仲間集団の閉鎖性尺度についても、性別による有意な差は認められなかった。

Table2 各変数間の相関係数

	他者との 関わり経験	興味・関心 の広さ	対人関係に おける受容性	仲間関係の 排他性	仲間集団の 閉鎖性
他者との 関わり経験		.34	.53**	.17	.21
興味・関心 の広さ	.37**		.46**	.17	.42*
対人関係に おける受容性	.32**	.16		-.12	.29
仲間関係の 排他性	.11	.17	-.24**		.11
仲間集団の 閉鎖性	.13	-.02	-.02	.39**	

注)右上半分の数値は男子の相関係数、左下半分の数値は女子の相関係数である。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

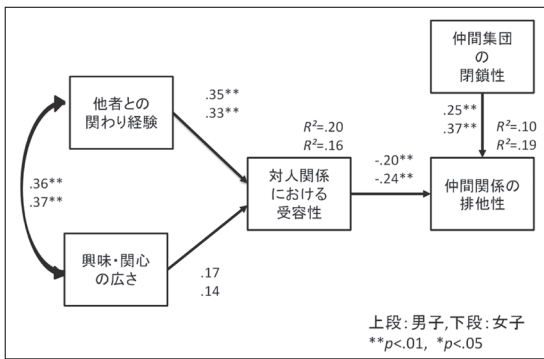


Figure2 性別による多母集団同時分析の結果

### 3. 仲間関係の排他性・対人関係における受容性・仲間集団の閉鎖性の関係性モデル

最初に、各変数間におけるピアソンの積率相関係数を求めた。その結果を Table2 に示す。次に、性別によって変数間の影響力に違いが見られるかについて検証を行うため、性別による多母集団同時分析を行った。パラメータ間の有意差について検討したところ、男子と女子の間でパス係数の有意差は認められなかった。そこで、パス係数に等値制約をかけて、再度分析を行った。その結果、すべてのパスに等値制約をかけたモデルの適合度指標は、GFI=.930, AGFI=.860, RMSEA=.064, AIC=51.633 であり、等値制約をかけないモデルの適合度指標は、GFI=.944, AGFI=.847, RMSEA=.074, AIC=55.576 であった。この結果から、等値制約をかけたモデルの方がかけないモデルより、適合度が良いことが示されたため、制約を課したモデルを採用した。その結果を Figure 2 に示す。数値はいずれも標準化したパス係数と相関係数を示した。以上の結果から、性別に関わらず、同じモデルが適用できることが明らかとなった。すなわち、対人関係における受容性は、他者との関わり経験からの正の影響を受けており、仲間関係の排他性は、対人関係における受容性から負の影響を受け、仲間集団の閉鎖性から正の影響を受けていることが明らかとなった。

## 考 察

本研究では、高校生の仲間関係の排他性に個人内要因である対人関係における受容性と個人間要因である仲間集団の閉鎖性がどのような影響を与えているのかについて検討を行った。加えて、対人関係における受容性に影響を及ぼす要因についての検討も行った。また、性別によって形成する仲間集団の特徴の違いが見られることが予想されたため、性別による要因間の関係性の変化につ

いても検討を行った。

### 1. 男女差の検討

分析の結果、男子高校生と女子高校生に同一の要因間の関係性モデルが適用できることが明らかとなった。すなわち、他者との関わり経験から対人関係における受容性へのパス、対人関係における受容性から仲間関係における排他性へのパス、および仲間集団の閉鎖性から仲間関係の排他性へのパスが有意であった。

この結果から、様々な特徴の他者と関わる経験を与えることは、対人関係における受容性を高める上で有意義なことであることが明らかとなった。しかしながら、興味・関心の広さから対人関係における受容性へのパスは示されなかったことから、『高校生の「対人関係における受容性」には、「他者との関わり経験」と「興味・関心の広さ」が影響を与える』という仮説 1 は、支持されなかったと言える。

一方で、性別に関わらず、仲間関係の排他性に対人関係における受容性が負の影響を与え、仲間集団の閉鎖性が正の影響を与えていることが示された。よって、仮説 2 『女子高校生の「仲間関係の排他性」には、「仲間集団の閉鎖性」と「対人関係における受容性」が影響を与える。』および、仮説 3 の『男子高校生の「仲間関係の排他性」には、「対人関係における受容性」が影響を与える。』は支持されたと考える。佐藤 (1995) では、男子高校生よりも女子高校生の方が仲間集団からの評価に敏感であり、仲間集団の規範に合わせようとすると言われているが、本研究の結果から、性別に関係なく、仲間集団に所属している高校生は、仲間集団に同調し影響を受けることが示唆された。よって、対人関係における受容性が低く、閉鎖性の高い仲間集団に所属している高校生に対しては、仲間関係の排他性の高まりを抑制するような指導や対応が求められると考えられる。また、これまであまり男子の仲間集団における困難さが着目されてこなかった理由として、仲間集団に所属している男子生徒の割合が女子に比べて少ないことが考えられる。本研究においても、約半数の男子高校生が仲間集団に所属していないと回答しており、特定の仲間集団に所属していない生徒が多いことにより、特定の仲間からの圧力や束縛あるいは仲間集団に所属しないことによる孤独や不安を感じにくいことが考えられた。

### 2. 仲間関係の排他性について

高校生の対人関係における受容性は、仲間関係の排他性に負の影響を与えていることが示された。すなわち、

対人関係における受容性が高まると、仲間関係における排他性が減少することが明らかになった。よって、対人関係全般において他者を受け入れる気持ちを高めることで、仲間関係において自集団に所属していない他者や自分と異なる特徴をもつ他者に対し、排除したいと思う気持ちの高まりを抑制することができることが示唆された。

また、仲間集団の閉鎖性は、仲間関係の排他性に正の影響を与えており、仲間集団の閉鎖性が高まると、そこに所属している個人の仲間関係の排他性も高まることが示された。このことから、生徒個人としては、仲間集団以外の他者と積極的に関わりたいと考えていても、閉鎖性の強い仲間集団に所属することで、仲間集団と同調し、自集団に所属していない他者を拒否する気持ちが高まることが考えられた。石田・丹村(2012)においても、仲間集団の閉鎖性が高い集団に所属している生徒ほど仲間からの評価を気にし、自分が仲間から排斥されないように仲間集団の閉鎖性に合わせようとする傾向があることが示されており、それを支持する結果であった。仲間集団の閉鎖性の高まりは、仲間集団間の交流を減少させることが推測されるため、仲間集団への所属に関係なく、生徒が交流しやすいような学校環境の設定や援助が重要であることが考えられる。

本研究の結果から、個人内要因である対人関係における受容性と個人間要因である仲間集団の閉鎖性の両方の要因が、小学生から高校生までにおける仲間関係の排他性に影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことから、仲間関係の排他性が高まる児童期から青年期に、個人内要因と個人間要因の両方からアプローチすることの重要性が示されたと考えられる。

### 3. 対人関係における受容性について

対人関係における受容性には、他者との関わりの経験が正の影響を及ぼしていることが示され、自分と異なる特徴を持つ他者と関わる経験を多くすると、対人関係において他者のありのままの特徴を受け入れる気持ちが高まることが明らかとなった。このことから、自分と異なる特徴をもつ他者と話したり、一緒に遊んだりすることで、その特徴に対してポジティブなイメージを持つようになることが示唆された。外国人と能動的な接触経験がある場合の方が受動的な接触経験しかない場合よりも、外国人に対する偏見が低いことが示されている研究結果や(大槻, 2006)、祖父母とよく話をする生徒の方が、あまり話をしない生徒より高齢者に対する評価が肯定的であることが示されている研究結果からも(竹田・太湯,

2002)、特定の特徴をもつ他者と関わると、その特徴をもつ他者に対する偏見や否定的なイメージが減少することがわかる。小学生・中学生の時期に様々な特徴の他者と関わる機会をもつことは、高校生になった時の対人関係における受容性を高めることにつながると考えられる。そのため、学校現場において、様々な特徴の他者と関わる機会を与えることは有意義なことであると言えるだろう。

一方で、興味・関心の広さと対人関係における受容性の関係性は示されず、小学生や中学生における関係性(松本, 2018a; 2018b)とは異なる結果が示された。この理由として、中学生から高校生にかけて興味・関心の幅には変化が見られにくいことが考えられた。児童・生徒の外国に対する興味・関心を調べた山口(1982)の研究において、外国に対する興味・関心は中学生と高校生においてほぼ類似の傾向が示されており、中学生段階で興味・関心の幅の固定化が始まっていることが示唆されていた。山口(1982)によると、中学生と高校生では、興味・関心の幅ではなく内容の質に違いが見られ、高校生になると興味・関心のある内容をより深く知ろうとするようになることが示されていた。このことから、高校生の対人関係の受容性には、興味・関心の単純な幅による影響ではなく、興味・関心がある内容をどれだけ深く知っているかという知識量のような要因が関連してくる可能性があると考えられる。よって、今後高校生の対人関係における受容性に影響を与える要因について検討する際には、興味・関心の測定方法を工夫する必要があるだろう。

### 4. 総合的考察

本研究の結果より、性別に関わらず高校生の仲間関係の排他性は、個人内要因である対人関係における受容性と仲間集団の閉鎖性から影響を受けていることが明らかになった。松本(2018a; 2018b)において、小学生と中学生でも同様の結果が得られていることから、小学校から高校までのすべての学校段階において、個人内要因である対人関係における受容性と個人間要因である仲間集団の閉鎖性の両方からのアプローチが仲間関係の排他性を抑制するのに有効であることが明らかになったと言える。特に青年期は仲間関係における排他性が高まる時期であるため、学校現場における仲間関係の問題を事前に防ぐために、個人の他者を受け入れる気持ちを高めたり、仲間集団の閉鎖性が高くならないように働きかけていったりすることが重要になると考える。本研究の結果を見ると、仲間集団の閉鎖性の平均点は1点台ととても低い値であり、ほとんどの高校生は閉鎖性の低い仲間集

団を形成していることがわかる。小学生、中学生（松本，2018a）と比較しても最も低い点数であり，仲間集団からの影響はそれほど大きくないように感じられた。しかし，高校生においても仲間集団からの圧力や束縛を感じているという報告があることから（須藤，2012），少数ではあるが高校生にも仲間集団の閉鎖性が高い仲間集団を形成している生徒がいることが予想される。本研究においてもほとんどの生徒が仲間集団の閉鎖性について1点代の「そう思わない」と報告している中で，仲間集団の閉鎖性が4点代の「そう思う」と報告している生徒が確認されている。このような生徒は，高校生になっても仲間集団からの影響を強く受けるため，仲間集団に対する不安を抱え，仲間関係の排他性も高いことが考えられる。よって，閉鎖性が高い仲間集団を形成している生徒に対しては，仲間以外と関わる機会を与えるなど，交流の幅が広がるような対応が求められると考えられる。

最後に，本研究の課題として，仲間集団に所属している生徒のみに対象を限定して仲間関係の排他性の高さについて検討してきたことが挙げられる。生徒の中には，仲間集団に所属していないにも関わらず，仲間関係の排他性が高く，仲間集団の形成に困難を抱えている場合があることも考えられるため，今後は，仲間集団に所属していない生徒も対象に研究を進めていく必要があると考える。

## 文 献

- ボッサード，J.H.S& ボル，E.S. (1971). 発達社会学：幼児期から青年期前期まで. 末吉俣次監訳. 東京. 黎明書房.
- 榎本淳子. (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 國枝幹子・古橋啓介. (2006). 児童期における友人関係の発達. 福岡県立大学人間社会学部紀要, (15), 105-118.
- 保坂一巳. (1993). 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について：私立女子高校での経験を振り返って. 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 15, 87-95.
- 保坂亨・岡村達也. (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討. 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 石田靖彦・小島文. (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連：仲間集団の形成・所属動機という観点から. 愛知教育大学研究報告教育科学, 58, 107-113.
- 石田靖彦・丹村明寿香 (2012). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範石井と逸脱行為に及ぼす影響. 学校教育講座 (心理学), 61, 117-125.
- 川岸弘枝. (1972). 自己受容と他者受容に関する研究：受容速度の検討を中心として. 教育心理学, 20 (3), 170-178.
- 高坂康雅. (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向：青年期における変化と友人関係満足度との関連. 教育心理学研究, 58, 338-347.
- 黒沢幸子. (2011). 思春期臨床と親支援：同質と異質のはざままで. 臨床心理学, 11 (4), 604-611.
- 松本恵美. (2018a). 児童期・青年期における受容性と排他性に関する研究：仲間集団の閉鎖性に着目して. 学校メンタルヘルス, 21 (1), 82-91.
- 松本恵美. (2018b). 児童期・青年期における仲間関係の排他性，対人受容性，仲間集団の閉鎖性の関係性に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 66 (2), 129-139.
- 松永あけみ. (2011). 児童期における友人関係理解の発達の变化：小学1年生から3年生 縦断的作文の分析を通して. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 60, 215-221.
- 三島浩路. (2004). 友人関係における親密性と排他性：排他性に関する問題を中心にして. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 51, 223-231.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. 教育心理学研究, 44 (1), 55-65.
- 大槻茂美. (2006). 外国人接触と外国人意識：JGSS-2003 データによる接触仮説の再検討. 日本版 General Social Surveys 研究論文集 (5), 2, 149-159.
- 佐藤有耕. (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析. 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 須藤春佳. (2012). 女子大学生が振り返る同性友人関係. 神戸女学院大学論集, 59 (2), 137-145.
- 竹田恵子・太湯好子. (2002). 中学生の老人イメージとその形成に関連する要因. 川崎医療福祉学会誌, 12(1), 161-167.
- 山口幸雄. (1982). 児童・生徒の外国に対する興味関心の発達傾向. 新地理, 30 (1), 17-24.
- 和田実. (1998). 大学生のストレスへの対処, およびス



トレス, ソーシャルサポートと精神的健康の関係: 性差の検討. 実験社会心理学研究, 38, 193-201.

和田実・増田匡裕・柏尾眞津子. (2016). 対人関係の心理学: 親密な関係の形成・発展・維持・崩壊. 北大路書房.

有倉己幸. (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 21, 161-172.

**謝辞** 本研究のアンケートを快くお引き受けくださった高校の先生方, アンケートに丁寧に答えてくださった生徒の皆様に心より感謝申し上げます。

高校生の仲間関係の排他性に対人関係における受容性と仲間集団の閉鎖性が与える影響について  
—性差に着目して—

本研究は、高校生の仲間関係の排他性に、仲間集団の閉鎖性と対人関係における受容性が与える影響について明らかにすることを目的とした。また、対人関係における受容性に他者との関わり経験および興味・関心の広さがどのような影響を及ぼすのかについて検討することを第2の目的とした。高校2年生を対象に質問紙調査を実施し、仲間集団に所属していると回答した111名(男子33名, 女子78名)を分析対象とした。その結果、性別に関わらず仲間関係の排他性には、対人関係における受容性が負の影響を与え、仲間集団の閉鎖性が正の影響を与えていることが明らかとなった。また、対人関係における受容性には、他者との関わり経験が正の影響を与えていることが明らかとなった。このことから、高校生の仲間関係の排他性を減少させる上で、対人関係における受容性を高めることと、仲間集団の閉鎖性を低めることが重要であることが明らかとなった。また、対人関係における受容性を高めるためには、様々な特徴をもつ他者と関わる機会を与えることが有効であることが示唆された。

キーワード：高校生、仲間関係の排他性、対人関係における受容性

The relationship of interpersonal acceptability and peer group exclusivity to  
interpersonal exclusivity in high school students.

There were two purposes in this study. The first purpose was to examine the effect of the interpersonal acceptability and the peer group closedness on the exclusivity in high school students. The second purpose was to examine the effect of the degree of interpersonal experience and the width of interests on the interpersonal acceptability in high school students. Subjects were 133 high school students. One hundred and eleven students answered that they were a member of a particular peer group. Therefore, in this study, only 111 students were examined. As a result, the interpersonal acceptability influenced negatively to the exclusivity and the peer group closedness influenced positively to the exclusivity in high school students. Moreover, students who had more experience of interacting with various people possessed higher interpersonal acceptability. It was suggested that increasing the interpersonal acceptability and decreasing peer group closedness are both effective to decrease the exclusivity on high school students.

Key words: High School Student, Exclusivity, Interpersonal Acceptability